

盲重複障害幼児とかかわり手との注意の共有と相互的活動の促進に関する事例的研究

松澤 由香

I 問題

「共同注意」は、障害の有無にかかわらず、子どものコミュニケーションや社会性の発達の基本的な課題として取り上げられている。則松(2004)は共同注意を広義に定義し、乳児とその母親の注意が重なり合ったと解釈されうる現象について、「注意の共有」という用語によって、三項関係に加えて、二項関係も取り上げて分析することの必要性を述べている。また、視覚以外の感覚モダリティによる共同注意に焦点をあてた研究はわずかであり、視覚に障害のある子どもと大人とがどのように視覚に拠らない方法で注意を共有しているのかについて検討する必要があると考える。

土谷(2006)は重度・重複障害を有する子どもとのかかわりにおいて、かかわり手の側の「注意の共有」が共同的・相互的コミュニケーションへとつながっていくと述べ、かかわり手が子どもの表出に対して触れて応じる「表出確認」の手続きを行うことにより、子どもの「意思」の表出に基づくやりとりが生じるとも述べている。しかし、身体接触による表出確認について詳細な分析はほとんどされていない。

II 目的

- 1 盲重複障害幼児と養育者との注意の共有が成立する場面の様相を明らかにする。
- 2 盲重複障害幼児とともに取り組む活動において、注意を共有するかかわり手の働きかけ(表出確認)が相互的活動に及ぼす影響を明らかにする。

III 方法

1 対象児

早期療育施設に通園する全盲のダウン症幼児A(本研究開始時、4歳9か月)。

2 手続き

1) 目的1の資料収集の期間、場所、方法

資料収集の対象は、A児とその母親との食事場

面とし、食事の様子をデジタルビデオカメラで記録、分析の資料として活用した。資料の収集は、2006年11月から12月までの間、A児が通う早期療育施設において4回の観察を行った。

2) 目的2の資料収集の期間、場所、方法

資料の収集は2007年1月から9月までの間、J大学特別支援教育実践研究センター、及びA児が通う早期療育施設において計19回行った。資料収集の対象は、A児とかかわり手(筆者)によるセラピーボールを使った粗大運動的活動(以下、ボール活動)、及び楽器を使った活動(以下、楽器活動)である。ボール活動は、直径85cmのセラピーボールの上にA児がうつ伏せ、あるいは仰向けでのり、かかわり手がセラピーボールを弾ませるように動かす状況を設定した。楽器活動は、A児とかかわり手がタンバリンやオーシャンドラムといった楽器とともに演奏する状況を設定した。A児とかかわり手との活動場面をデジタルビデオカメラで記録し、分析の資料として活用した。

3) 資料分析の方法

(1) 目的1について

日仏の母子相互交渉場面を分析した則松(2004)の行動カテゴリーを参考に、A児の実態に合わせて作成した行動カテゴリー表により、A児と母親の行動を分析した。

(2) 目的2について

ボール活動、楽器活動のトランスクリプトを作成し、以下の点について分析を行った。

①対象児とかかわり手との相互作用について

a) A児の身体表出、b) A児の発声、c) 表出確認、d) 相互作用成立水準(伊藤・西村, 1999)について、その頻度と内容の分析を行った。

②表出確認の手続き後のA児の表出行動について
かかわり手の表出確認後のA児の表出行動を「注意」「接近」「回避」「反応なし」「判別不能」

の5種類の行動に分類し、分析を行った。

IV 結果

表1 注意の共有が成立している場面のきっかけ(頻度)

セッションNo.	1	2	3	4	合計
A児の行動	0	0	1	1	2
母親がA児の様子に視線を向ける	0	7	1	6	14
母親による声かけ	0	8	0	7	15
母親による身体的働きかけ	0	2	1	1	4
母親による食物準備	10	9	11	12	42
母親が食物に視線を向ける	0	0	1	2	3

1 目的1の結果

A児と母親の食事場面の行動カテゴリー表から、則松(2004)における「注意共有現象」の定義に基づき、「両者の注意が同一のモノへ向かったとき」に加えて「両者の注意が互いに向かい合ったとき」を取り上げて分析した(表1)。A児の行動が注意の共有のきっかけとなっている場面が2場面あり、それ以外の場面におけるきっかけは、母親が起こした行動であった。

2 目的2の結果

1) A児の人やモノに向かう表出行動と、かかわり手が表出確認の手続きを行った割合との関連

A児の表出行動の中から、人やモノに向かう行動を抽出し、その表出頻度とかかわり手が表出確認の手続きを行った割合を取り上げて分析した。

A児の楽器や人に向かう行動とかかわり手が表出確認の手続きを行った割合との関連は、図1に示した通りである。A児の表出行動、かかわり手の表出確認の手続きとともに増加傾向を示していることから、両者は平行した関係にあるといえる。ボール活動については、両者の関係を見出すことはできなかった。

2) 表出確認の手続きの割合と活動の相互作用との関連

相互的活動に対して、かかわり手の表出確認の手続きが及ぼす影響を活動の相互作用状態から分析した。分析対象場面は、かかわり手が表出確認の手続きをした割合が低かった2セッションと高かった2セッションとした。また、子どもとかか

わり手の相互作用を文脈的、双方向的に捉えるため、相互作用の過程もみていくこととした。

各活動における子どもとかかわり手のやりとりの文脈を示す相互作用の成立状態をA水準(相互作用成立状態)、B水準(相互作用成立寸前状態)、C水準(相互作用不成立状態)に分け、さらに行動の開始者がかかわり手から(A-I, B-III, C-V)、あるいはA児から(A-II, B-IV, C-VI)の別によって分け、3水準6型に整理した。楽器活動における相互作用の成立状態と行動の開始者による分類の結果を図2に示した。

相互作用の成立状態については、A水準の割合が最も高い結果となった。また、A児から活動が展開されているA水準のII型、B水準のIV型を見ると、表出確認の割合が高いセッションの方が高い値を示していた。ボール活動についても同様の結果であった。

3) 表出確認の手続きをした後のA児の表出行動

相互的活動に対して、かかわり手の表出確認の手続きが及ぼす影響を明らかにするために、表出確認後のA児の表出行動を分析した。結果は、図3に示した通りである。楽器活動において、かかわり手の表出確認の手続き後のA児の表出行動として、「注意行動」が66%で最も高く、次に「反応なし」28%であった。ボール活動においても、ほぼ同様な結果であり、表出確認後のA児の行動として最も高い割合を示したのは「注意行動」であった。

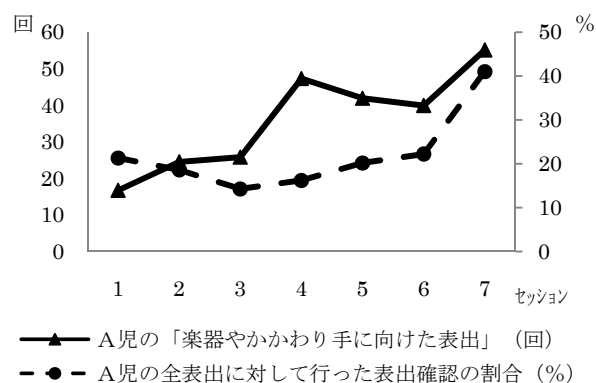


図1 楽器活動におけるA児の表出と表出確認の関連

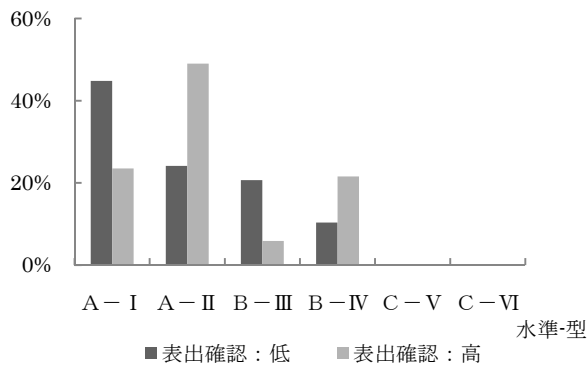


図2 楽器活動における相互作用の成立の割合

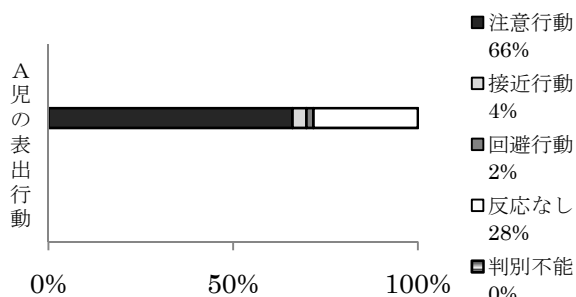


図3 楽器活動におけるかかわり手の表出確認の
手続き後のA児の表出行動の割合

V 考察

1 目的1に関する考察

A児と母親、「両者の注意が互いに向かい合ったとき」の「注意の共有」現象は、母親がA児の表した行動に自分の注意を重ね、働きかけることで成立していた。また、頻度はわずかであったが、A児の行動が母親の注意を喚起していた。A児は全盲であり、「視線」を母親の注意を喚起することには使用できないが、「視線」以外の「身体的行動」という方法が母親へ何らかのメッセージを伝えるサインとなっていた。

盲重複障害幼児とその母親との食事場面では、母親が子どもの行動に自分の注意を重ねることで、「両者の注意が同一のモノへ向かう」または、「両者の注意が互いに向かい合う」という「注意の共有」現象が成立し、母親が子どもの口に食物を運び、それを子どもが食べるという母子の「共同活動」が行われていた。母子の「共同活動」は、「注意の共有」現象の成立の上に成り立っているといえる。

2 目的2に関する考察

かかわり手による表出確認の手続き後のA児の表出行動として、注意行動、接近行動、回避行動がみられたことは、表出確認の手続きをしているときに、両者の注意がA児の表出部位に向けられていると捉えることができ、「注意の共有」現象が成立していると考えられる。言い換えると、かかわり手の表出確認の手続きは、子どもとかかわり手の「注意の共有」現象のきっかけであると考えられる。

図1の結果から、盲重複障害幼児にとって、楽器活動のように、聴覚によって場所を定位しやすい触運動系の活動では、子どもの人やモノに向かう動き（接近行動）とかかわり手の表出確認の手続きとの関連が示唆されたといえる。子どもの表出に触れて応じる働きかけは、A児のような視覚に障害を有する初期の発達段階の子どもたちとかかわる上で必要な働きかけであると考えられる。

かかわり手の表出確認の手続きの割合と活動の相互作用成立状態との関連の結果から、子どもの表出に対して、かかわり手に向けた表出であるとは思えなくても、その表出を受け止め、子どもとともに確認する手続き（表出確認）によって、子どもの表出に応じることができ、子どもの意思に基づいたやりとりへと展開させていくことができるのではないかと考えられる。

VI 今後の課題

活動の相互作用状態について分析したが、表出確認の手続きが活動全体の相互作用の推移にどのように影響しているかについては、検討できなかった。今後の課題であると考えられる。

文献

- 伊藤恵子・西村章次（1999）自閉性障害を伴う子どもの相互作用成立要因に関する分析的研究．発達障害研究，20（4），316－330．
- 則松宏子（2004）共同注意と文化的文脈．大藪泰・田中みどり・伊藤英夫（編著）共同注意の発達と臨床．川島書店，Pp299－336．
- 土谷良巳（2006）重症心身障害児・者とのコミュニケーション．発達障害研究，28（4），238－247．